

ウラキンシジミは六甲山系にもいると聞きながら、あえて探索したことはなく、初めての出会いは1975年7月の裏日光奥鬼怒。本種がどのような習性で、どのような環境に生息しているかなどまったく予備知識がないまま、遊歩道沿いの薄暗い林縁を飛ぶ小さなチョウをネットインしたら、それが偶然ウラキンシジミだったという次第。今でも三角紙標本のまま保存しているが、よく1976年の同日に初めて家族旅行でツアー参加したあと、飛行機の時間までタクシーを利用して支笏湖まで足を延ばした際、湖畔で記念撮影を終えたところに飛来した小さなシジミチョウを何気なくネットインしたらウラキンシジミだったというラッキーがあり、この個体もまだ三角紙に入れたままとなっている。

その後、埼玉の蝶友から長野諏訪郡原村産の蛹を提供してもらい、複数頭の羽化個体の標本化をしている



が、各地域で裏面の金色鱗粉の色調や明るさにわずかだが差異がみられる。

#### July 23, 2014 大鹿村でウラキンシジミとフジミドリシジミに出会う

飯田からしらびそ高原までの大回り迂回は大鹿村から地蔵峠を経由するルートで初めて走る山道だ。途中、休憩したカーブ地点で周辺をチェックしていると、妻が「頭の上の葉っぱに何かいるよ」と教えてくれる。確かにカラスシジミかと思えるゼフィルスが動いている。ビデオカメラを準備してはっきり映像としてとらえると、何と、ウラキンシジミではないか。新鮮度は低いはまだ金色鱗粉は残っており、本種の撮影記録は初めてのこと。何度となくいいことが起こる地点で休憩タイムをとり、さらには思いがけないチョウを発見してくれる妻に感謝だ。

ウラキンシジミがとまっていた葉はコナラのように見えたが、すぐ隣にトネリコがあって本種がいたことに納得。帰路に再度チェックした際に、小さなチョウがフラフラと飛び出し、道路上に静止したかと思うとまた飛びそうな気配にネットインをして確認すると、なんと初めて実物を見るフジミドリシジミのくたびれた♀。自然状態の撮影記録が撮れそうにないので放してやると、よろよろと飛んで道路下の樹の枝葉部分へともぐりこむが、その樹はまさしくブナの木で、このような高標高でもないところでもフジミドリシジミが発生することを知る。できれば発生初期にきてみたい。



なお、本種は姫路市内にも産地があり、2015年には加古川市近郊での発生が確認された。